

馬込川の新堤を切って、洪水を排水させた

浜松市南区江之島町 松山道昭

江之島では、天竜川西派川・金折が切れたとき、福島との境にある南北の堤防から洪水が押し寄せ、父が水防に出かけていたが、いよいよ福島神社付近で水路堤防が切れたと言うことで、父が自宅に帰って来て、水揚げ作業を開始した。江之島では、東の方は地盤が比較的高いが、(静岡県立江之島高校に近い)我が家は、西にあり、床面程度の床上浸水となった。洪水が家に入ってきたとき、自家製味噌の樽が浮き出したので、急いで縁側の高いところに上げた。土蔵は、幸い地盤が盛り上げて高くしてあったため、お蔵に保管したものは被害を免れた。

洪水の当日は、お蔵に入ってアマ(天井裏)に家族全員で寝た。洪水では、周り一体が浸水していたが、馬込川の水位は低かった。そのため(今の南区役所北側にある)白山神社北側に新しく作った堤防を掘削して、天竜川の洪水を馬込川に排水することにより、早く江之島の宅地や田畑の水が引くように大人たちが工夫した。洪水が引いた後、収穫前のサツマイモに水がかぶったため、芋が腐ってしまって、我が家でも大きな損害を受けた。また、福島との境の水路堤防が切れた箇所は、砂が溜まって運動場の様に遊べた。

新貝橋の上を洪水が流れる寸前、橋を渡って自宅に帰った

浜松市南区新貝町 村越庄一郎

新貝では、金折が切れたとき、上流側の西派川を隔てた東側の輪中に当たるため、家は浸水しなかった。飯田街道も、地盤が高いため、浸水しなかった。破堤当日、私は浜松の(現在で言う)高校へ通っていたが、天竜川の水位が上昇したという呼び出しがあって、途中で早引けして帰宅することとなった。

西派川を渡る木橋の新貝橋のところに来たら、流木が橋の上流にたくさん引っかかって、そこで水位が上昇しているため、

橋の上を流れる寸前の状態だった。注意して、橋に衝撃を掛けないようにとの大人達の注意に従って、足下に注意しながらやっとのことで、橋を渡り終え、自宅に帰った。それから15分くらいで、橋は流出してしまった。自宅へ帰って、30分くらいしたところで、「金折の堤防が切れた」という報を父親から聞いて、すぐに見にいった。西派川の左岸側から、右岸側の青島小三郎さんの自宅が流失していくのを見て、洪水の恐ろしさを知った。

旧西派川を振り返ると、水深が深くて流れが緩やかで、子供達が遊びで泳ぐには良く、魚もシジミも捕れてよかった。

芳川村役場も床上浸水の被害を受けた

浜松市南区四本松町 大山英雄

昭和20年9月16日復員して郷里に帰り、10月から芳川村役場に復職勤務した。破堤当日の10月5日は平常の勤務をしていた。午後1時30分頃、天竜川(西派川)が金折地内で堤防が決壊(破堤)したという報告が入った。芳川村役場付近では、現在の浜松市立南陽中学校付近が滞筋となり、芳川の堤防を溢水して芳川に流入した。今ひとつの流れは、石原から四本松の北側を西に流れ、四本松熊野神社の北側の芳川堤防左岸を決壊し、芳川右岸を溢水して大柳、鼠野に浸水した。

芳川村役場への浸水は、午後6時頃から始まった、たまたま役場の客だまりに、石油缶2本に入ったカーバイドが置かれていた。これが水分を含み発火した。幸い外に防空壕があったので、それに封じ込め、事無きを得た。浸水は11時ころまで続き、最高時は役場の床上20cmまで達した。10月7日、中ノ町村から水害見舞いとして四斗樽二本の水が届けられた。(村役場玄関に大きな天竜川の船が横付けになった驚き)

また、戦後の物資の乏しい、厳しい時代に2tトラックに一杯の握り飯が救援物資として届いたが、掛塚街道が大橋以東は水流となっているので、橋のたもとの佐

藤商店(練り物製造)の店先の作業場に降ろした(白米のお握りなど当時は貴重品)。それを配分するのが難しく、当時は電話連絡という方法もなく通行人に「食料の見舞い品が来ているので皆さんに知らせて、取りに来てほしい。」と伝達を依頼した。2日目の夕方には配分が終わった。金折から洪水で流れついた家屋(屋根)が南陽中学校の西側の芳川堤防に止まっていた。

流出した家屋11棟 死者20人
10月8日静岡県から視察が来られた。天竜川西派川金折地先の破堤延長は80m。洪水が引くのに2週間を要した。その後、被害の大きい「金折」、「古川」を中心に耕地整理組合を発足させたが、農地の復元を図った。なお、四本松熊野神社裏に流入した滞は、芳川左岸を決壊したため、五島天竜川停車場線以西は、幅50m 延長250m 深さ2～3mの土砂が流出した。その後数年の間大池となっていた(現在の杏林堂所在地等)。

天竜川の洪水が芳川の右岸堤防を乗り越えて大柳を襲ってきた

浜松市南区大柳 沢木栄一

10月5日夕方16時半頃、半鐘が鳴り出したので、何があったと思い外に出てみたら、「芳川の大柳の橋のたもとに1軒で1人、カマスか俵を1つ持って出よ」と警防団が言って来たので、我が家では私が出た。橋のたもとで水位上昇が急だったので、何かと思っていたら、左岸の四本松の樋管のところで、「ドン」という大きな音がして、芳川の堤防が切れて天竜川の洪水が流れ込んできた。夜21時頃になって、芳川の流れが急に速くなり、大柳の橋が流失した。その後、瓦屋根が流れてきて、「助けてくれ」という声が暗闇の中に聞こえてきたが、流れが急でとても助けることが出来なかった。

大柳のお寺「ふせん寺」の前の堤防に、天竜川の洪水が乗り越えて、右岸に流れ込んできた。夜22時から23時頃、洪水が我が家の縁の下に入ってきて、履物が

流れ出したため、家族で必死に流失しないように防いだ。その後、我が家では床すれすれの床下浸水(水深30cm以上)にとどまったが、隣保では床上浸水になった家もあった。

翌朝になったら、辺り一面水浸しで、畑は水深1mくらいだったので、そのままでは畑に行けず、舟を借りてきて畑に行った。畑では、陸稲が刈り取ってあったが、洪水で流されてしまって、無くなっていた。カボチャは軽いので、水面に浮いていた。また、洪水の後、畑のモグラが逃げるところが無くなって、芳川の堤防に集まってきた。

水が引くとき、五島村の西島が堤防を切ったことにより、早く水が引いたと話題になり、大柳でも堤防を切るか、切らないかで随分議論になったが結局、大柳の一番南西端にある大柳新田の八幡神社の南にある「十八のイリ」を切って排水させた。

洪水が芳川を乗り越えて鼠野に押し寄せた

浜松市南区鼠野 鈴木美義

10月5日は、芳川のせぎの堤防の低いところで浸水が始まったため補強に行ったところ、夕方17時頃鼠野区長が金折から自転車で逃げてきて、「金折の堤防が切れた」と私たちに伝えた。それとほとんど同時に水位が上がりだしたので、家に戻ってきた。天竜川の洪水は芳川の堤防を乗り越え、鼠野に押し寄せてきた。家では床まで水がついた。洪水は3～4日水が引かなかった。

洪水が引き始めたとき、せぎの下流約300mの堤防の土質が緩かったため、そこが洗堀されて、住宅や田圃側の水が芳川に排水された。芳川の左岸側の「御給」地先では、地盤が低かったために水はけが悪く、1ヶ月も水がついていた。

救援物資は、災害後一週間程度して水がある程度引いてから、中田島から舟を借りて、芳川を上り大橋まで行き、それから東に向きを変え芳川農協まで行って、精米を舟に乗せ、鼠野に戻り、みんなで分けた。

それから我が家の東隣の家は、洪水前に芳川のすぐ隣にあったが、洪水後しばらくして引っ越ししてきたが、その爺さんが「金折が切れた夜、上流から家が流されてきて、助けてくれ」という声が闇の中から聞こえたが、どうしてやることも出来なかった。その人は結局、行方不明のままとなった。その声が忘れられず、耳について夜眠れなかった。」という話をよく聞かされた。大変つらい思い出だった。

浜松市南区福島町の状況

単身赴任の父が家にたどり着いたのは10月7日だった

浜松市南区福島町 内山宏之

洪水が迫っているのを知った時は、暗くなっていた。自宅の近くの半鐘が激しく鳴らされた。何かと駆けつけると、警防団の人が「天竜川の水折が切れて、大水になるぞ」と伝えたので急いで家に帰った。家に戻る途中、洪水が田圃に落ちる音がザーザーと聞こえた。間もなく家の庭先にヒタヒタと水が押し寄せ、やがて濁流となった。家では、お米や、身の回りのものを集めて長屋の2階に避難させ、水がさらに増水したので母屋の畳を上げた。最後に、飲み水を確保するため、掘り抜き井戸が濁流に潜る前に急いでバケツに水を汲んだ。

祖父母と母、子供たちで長屋の2階に避難した。水は母屋の床上10cm程度まで来たと思われ、庭では流れが早く、深く長屋から母屋には行けなかった。当時はラジオも聞けず、電話も無く、周辺の状況が全く分からなかった。救援物資は、「おにぎり」が舟で配られた。

当時静岡に単身赴任していた父が自宅に戻ろうとしたが、途中の芳川村大橋まで来たが、それから先は水位がまだ高いため、10月7日になってやっと自宅にたどり着いた。

洪水は1週間は引かなかった。田圃の稲は、水につかったままで、芽が出て駄目になった。サツマイモを掘りに行ったが、腐って駄目になっていた。海には流木が一面に漂着していた。

浜松市水防団 水防のおもいで昭和52年度 飯田分団長 武藤幸男

敗戦の年、昭和20年10月初旬の豪雨、天竜川西派川金折地先で堤防が決壊しました。確か夕方の記憶です。安間川の水門のすこし上流堤防(現在の市場道路の市場橋付近)に漏水、溢水箇所が見つかり、総代(現在の自治会長)を通じて非常招集があり、手に手にショベル、むしろ、土俵になる材料を持ち寄っての水防作業中に、急激に水量が低くなりました。その時、年寄り達が「どこかで堤防が切れたので、水が引いたのだ」と言っていました。しばらくの時が過ぎて「金折堤防の防空壕跡が決壊」の報が来ました。駆け付けた現場はものすごい水流で、小舟など寄せ付けず、堤防は怒濤のごとく押し寄せる水勢に見る間に切口を広げ、その有様はあ然とするばかりでした。この時金折の住民20数人の方々が犠牲になりました。私の下飯田は金折の決壊により床下床上浸水家屋がほとんどでした。

決壊の難は逃れたと今でも四方山話に出てきます。堤防決壊の原因は言うまでもなく、旧日本軍の防空壕にあったのです。軍国主義一辺倒の時代、村役場、地元民の抗議すら許されない時代でしたと思います。苦しみながら水魔の犠牲となられた20数人の人々の魂の慰みに、私達子孫に至るまで堤防の中に空洞を作るようなことは、絶対にあってはならないと思います。

昭和55年度～ 飯田分団長 伊藤彰一

私が小学校2年生の頃であった。天竜川西派川が流れていて、その川の近くで生まれた私は、幼い時からよく魚釣、水遊びをして楽しく遊んだ。

この日降り続いた雨はいつになく水量を増し、堤防で手が洗える位までになった。スコップにむしろ、俵、かます等が用意されていました。私は何回か天竜川を覗きにいった。最後の時である。どこか下流の方でバケツか何かたたいている音が聞こえた。恐ろしくなって走って家へ帰っ